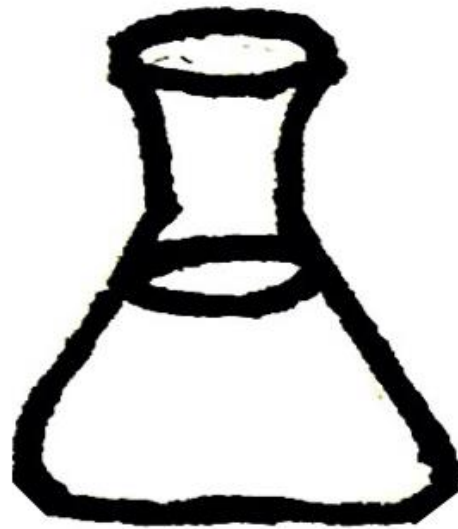


き みょう あ お え き た い  
奇妙な青い液体



文&絵：

Cameron Sheehy / シヒ・キャメロン

JAPN 3302 Advanced Japanese Spring 2021

「しんちゃん、ただいま！」

「おかえり、ママ！」としんちゃんが言った。

お母さんはテーブルに近づいて行き、その上にボトルを置いた。

そして、鞆も置いた。

それからしんちゃんのところへ歩いて行き、抱きしめた。

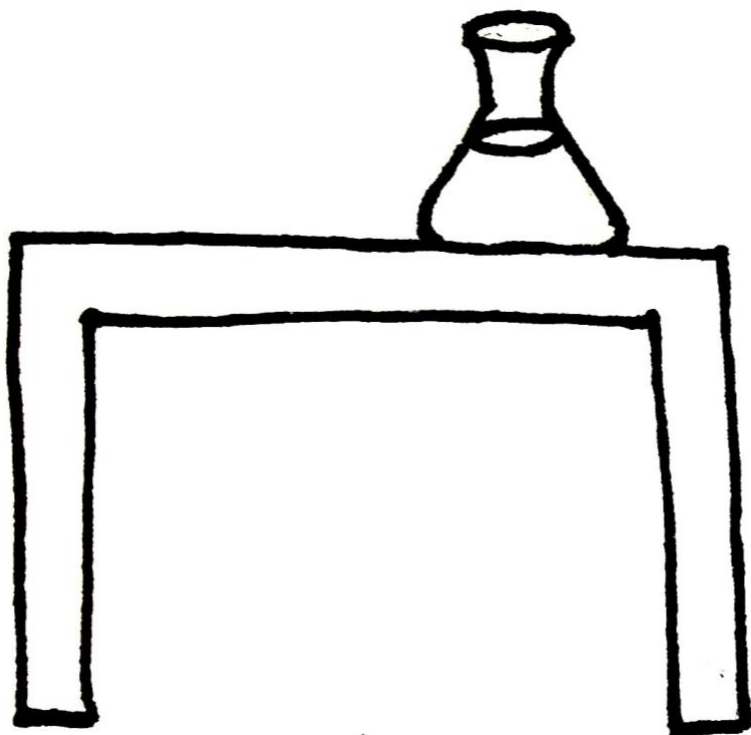
「ママ、それ、何？」

「ああ、それは仕事のために使うのよ！非常に重要な。」とお母さんが言った。

「そう、わかった。」としんちゃんが言った。

ボトルは奇妙な青い液体で満たされていた。

しんちゃんがボトルをよく見た。



「パパ、どこ？」とお母さんが聞いた。

「庭にいるよ！」としんちゃんが言った。

「じゃあ、庭に出て、パパと一緒に仕事をするわ。ボトルを倒さないでね！」

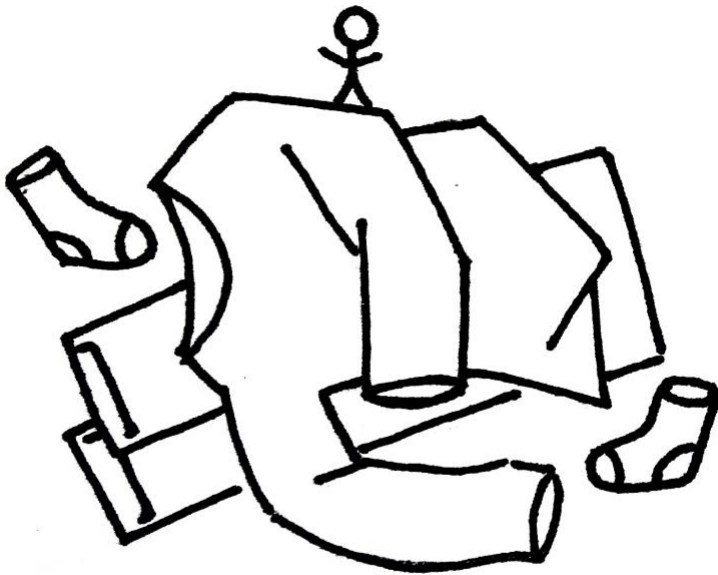
お母さんは部屋を出て、お父さんに会うために外に出た。

しんちゃんはあるテーブルに歩いて行き、青い液体をもっと詳しく観察した。

「美味しそう!」と思った。

「ママが倒しちゃダメだと言ったけど、その液体を飲みたいな。」と思いつつ続いた。

お母さんが気がつけろと言ったのに、しんちゃんは液体を飲んでしまった。



いきなり、しんちゃんが小さくなり始めた！

小さくなったので、服はダボダボになった、だから、服を脱いで裸になった！

「何が起こったんだ？」と叫んだ！「裸なんだ！」

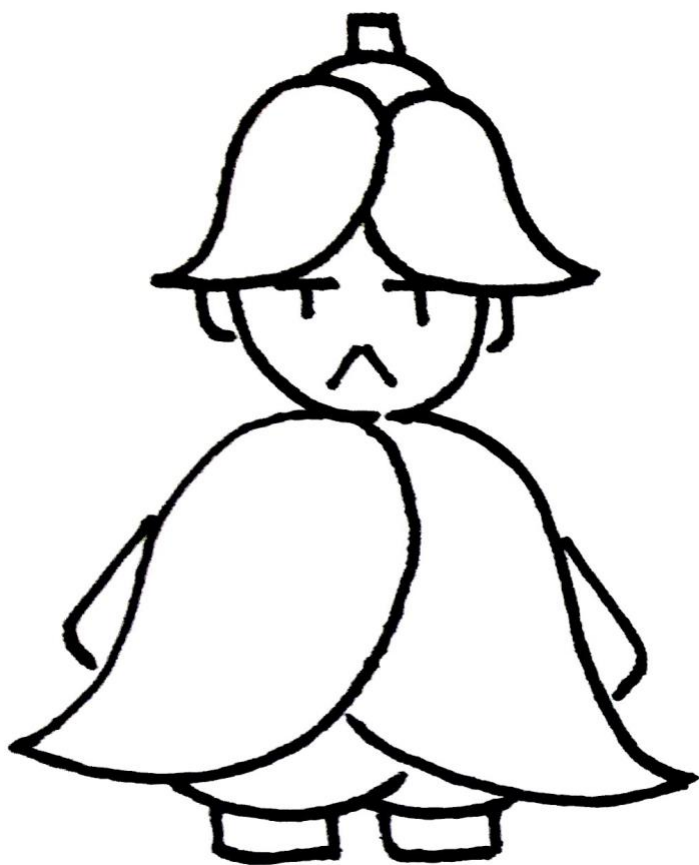
しんちゃんは虫のように小さくなってしまった。

「どうするかな？」としんちゃんが思った。

しんちゃんが心配になり始めた。

「ママを探さなきゃ！」

しんちゃんはテーブルから庭まで歩き始めたけれど、外に出るのに少し時間がかかった。



しんちゃんが庭にわに着ついた時とき、呼よんだけど、両親りょうしんは彼の言いうことが聞きこえなかった。  
というのは、小ちいさかったので、声こえがあまりにも小ちいさかったから。  
そのため、お母かあさんに会あうために近ちかづいた。

「行いくよ！」としんちゃんが言いった。

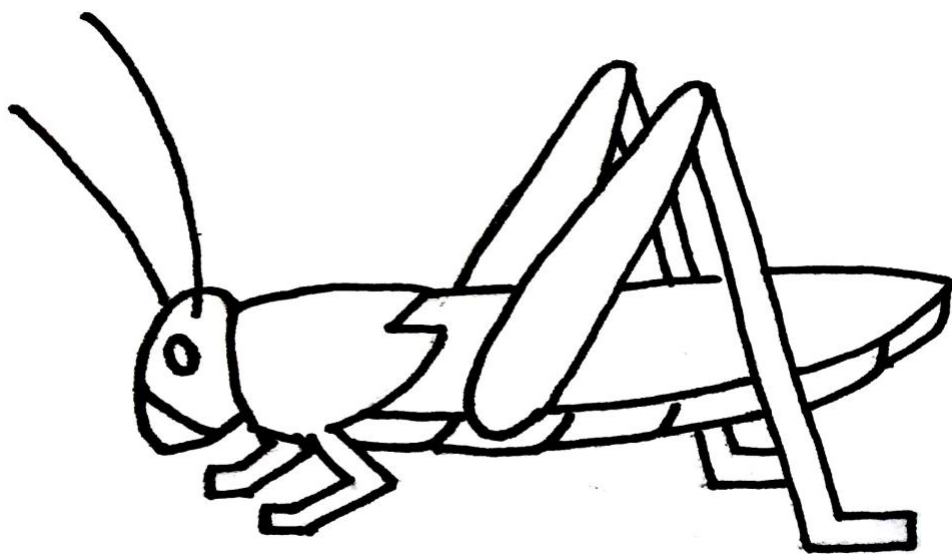


最初さいしよ、しんちゃんちいは小さな花はなを取り、服ふくを作つくって着きた。

そして、しんちゃんくまは草とを飛こび越つきえて月おおのような大おおきさのトマトを目撃もくげきした！

それで、急きゆうにバッタでがき出て来きた！

大おおきい声こえで、「あああ！恐おそろしい！死しにたいくない！」と言いった！



しんちゃんはバツタから逃げ始めた。

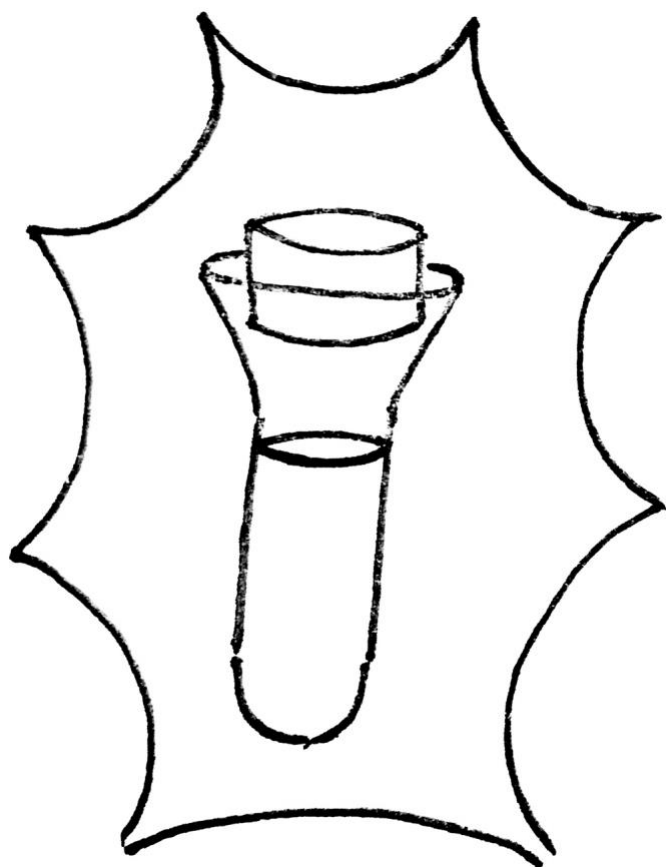
「え？しんちゃんの声が聞こえた？」お母さんが言った。

「本当だ！そこを見て！」とお父さんが言った。

両親はしんちゃんが追いかけられるのを見て、早くしんちゃんを救った。

「しんちゃんを直すために解毒剤を連れて来る」とお母さんは言った。  
家の中に行つて、解毒剤を待ちながら戻つた。

「倒さないように言つたでしょ？しよががないな。」と言つて、しんちゃんに解毒剤をあげた。  
しんちゃんは、解毒剤を飲んで、すぐに大きくなつた。



「普通ふつうに戻もどった！やったー！」としんちゃんが言いった。

「ちよっと待まってね。少すこし大おおきくなっと思おもうけど…」とお父とうさんが言いった。

お父とうさんは巻尺まきじゃくを使つかって、しんちゃんの丈たけを計はかった。

「本ほん当とうだ！」センチメートル成せい長ちようしたよ！すごいね。」と言いった。

急に、「それ、何?！」とお母さんが叫んだ。

お母さんは、外にいる小さな犬のような大きさのバツタを指さした。

「嘘でしょ!大変ね。バツタは、解毒剤を少し飲んだらしい。」とお母さんが言った。

「ママ、バツタをペットとして飼おうよ!」としんちゃんが言った。

そして、両親は、「えっ?」と一緒に言った。

